



発注者としての技術力（酒・麻雀・ゴルフ）

先本 勉（元 近畿建設協会）

1. はじめに

岡山県北の城下町、津山に1955年に生まれ、進学校に行くには成績が少し足らず、結果、工業高校に進み、土木、建築、機械、電気、工業化学の中から何故か土木科を選択したのが土木技術者の始まりでした。今から思えば、当時の田中角栄の「列島改造論」に何らかの影響を受けたのかもしれない。

就職に当たって当時、昭和48年頃は「高度経済成長」真っ只中であつた。就職先には、公務員、ゼネコン、コンサルタント等、求人が多数あるなか、建設省近畿地方建設局の採用試験を受けるべく準備をしていました。そんな中、当時の土木科長（元国鉄職員）から「国鉄から求人が来たが、先本君のお父さん国鉄だよね・・・行かないか」と進められ父と相談した結果、父は大歓迎であつた。

昭和48年4月国鉄大阪工務局土木課に採用となり、当時、高卒の新規採用が5人で、5年ぶりということもあり、諸先輩方から色々な面でご指導を受けました。特に、「国鉄職員たるもの「酒」、「麻雀（国鉄ルール）」、「ゴルフ」が出来ないと勤まらない」と厳しいご指導を受け、今では、ゴルフもお酒も、たまにOBを出しますがシングルを維持しています。

その後、昭和62年の「国鉄改革」により国策で国・府県市等への転職が進められ、結果的に建設省近畿地方建設局の採用試験を受けて入局し、60歳の退職まで勤め、現在に至っています。

2. 技術の基礎

国鉄時代は、14年間で3現場、4部所（東京を含む）を異動し、特に現場では週に2～3日は巡回と称して、「工事の進捗状況の把握」「鉄筋型枠等検測立会」「品質管理立会」を行うと共に、軽微な構造変更は自ら測量～図面作成～積算を行っていた。

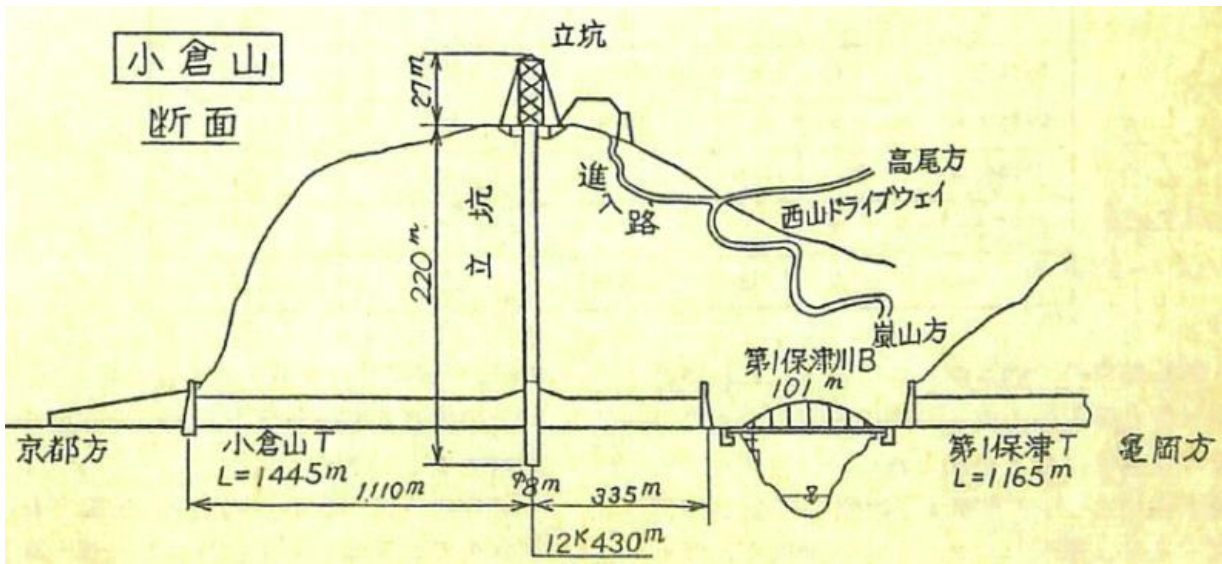
特に、国鉄時代最後に携わった「山陰線嵯峨～馬堀間複線電化工事」では小倉山工区（写真-1）を担当し、小倉山山頂から直径8m、深さ220mの立坑を掘削、小倉山トンネル1,455mと第一保津橋梁（アーチ橋：橋長101m）の資機材搬入用立坑（図-1）を担当しました。

その工事では、立坑掘削70m付近から多量の湧水（約1.3t/分）が発生し、水との戦いになりました。1回目の薬液注入（1ステージ27m）を試行錯誤で実施した結果、途中で掘削不可能となり、その時は失敗に終わりました。

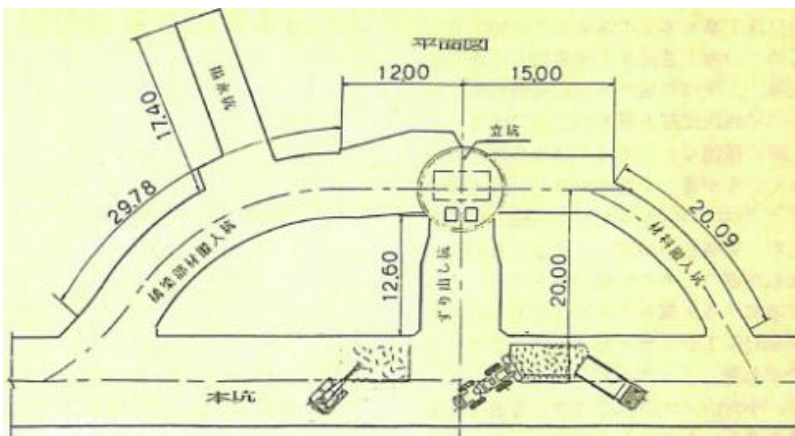
その後は、注入順序、注水試験による注入圧、注入材料を組合せた作業フローを作成し、薬液注入を坑底から4回実施、約1年を要して掘削が無事に完了、本坑、橋梁架設を完成させました。図-2に立坑掘削要領を示す。



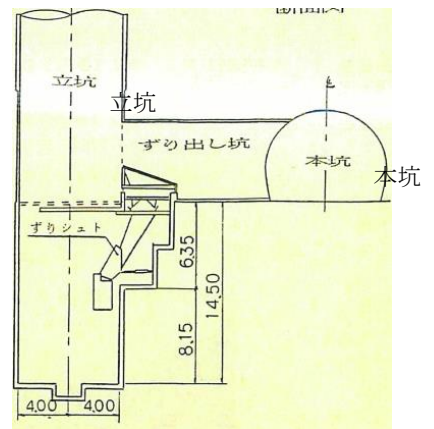
写真-1 山陰本線小倉山工区



立坑断面図



坑底設備平面図



坑底設備断面図

図-1 資機材搬入用立坑図

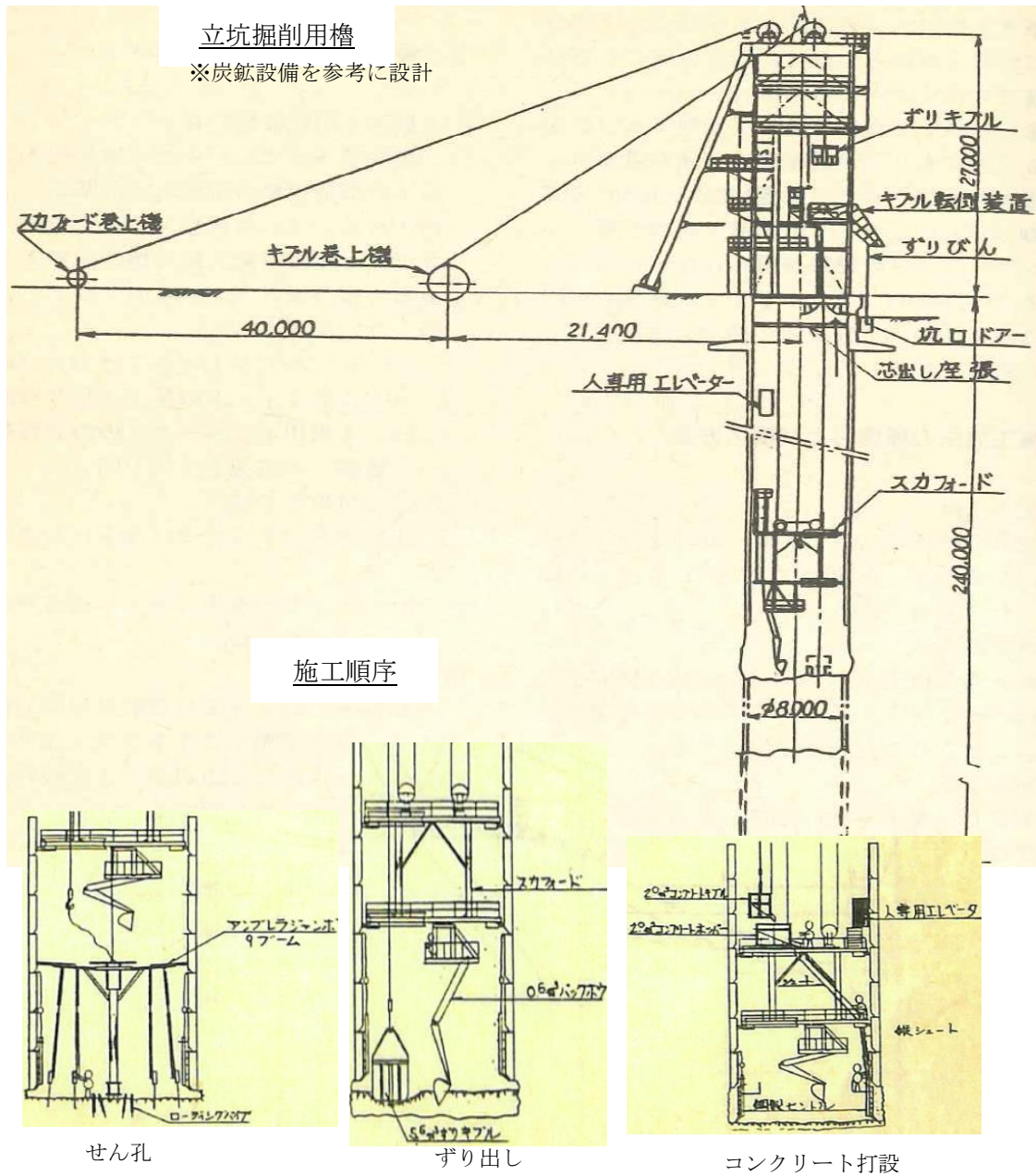


図-2 立坑掘削要領

現在は、当時の施工業者を含めた「小倉山会」を年1回程度開催し、当時の苦労話で酒を酌み交わしています。

また、その当時、隣の保津工区現場所長をされていたのがCWVの大先輩の田中輝彦さんであった。当時、土木の基本を分かり易く本にまとめられた「土木への序章」(写真-2)を出版され、著者のサイン入りを今でも大切にしています。



写真-2 土木への序章

3. 発注者としての技術力

昭和 63 年 4 月に建設省近畿地方建設局大滝ダム工事事務所を振出しに、28 年間で道路系の維持管理、改築、保全等、11 部所を異動しました。発注者としての立場で一番記憶に残っているのが、平成 5～8 年の維持修繕係長時代に「車両の大型化に伴う 25t 対応」、「阪神淡路大震災」に係わった事です。

25t 対応では、設計輪荷重が 8t→10t に変わることにより、全ての橋梁が応力的に OUT になるのにどう補修・補強していくのか疑問に思った。その後、死活荷重比による照査手法や実応力測定を実施する等の手法が示され、管内の橋梁をチェックする業務に携わり既設橋梁の基礎知識を学ぶ機会となった。特に、床版補強の上面増厚工法に興味を持ち、マニュアル作成や積算歩掛を作成し、全国に発信したことは、発注者としての技術力の成果の一つである。

阪神淡路大震災では、災害復旧費の申請を担当し、1 月中に 550 億円の申請書を作成し、部長説明で机を叩かれて「1000 億円だぁ・・・」と言われ再調査をすることとなった。「災害復旧申請書」となると写真と数量の根拠が必要であり、徹夜の連続で資料作成や耐震補強に係わる「復旧仕様」作成に係わった関係者の皆様方に感謝するとともに、当時のプラス 500 億円が震災復興を加速させたと思っております。

その後は、行政マンとして産・学・官連携「新都市社会融合創造研究会」のプロジェクトや「防災ドクター」、「橋梁ドクター」に係わり、先生方や業界の方々とお付き合いする機会が増えたことは、私にとって技術力の大きな財産になったと思っています。

4. おわりに

私の技術の原点は、「現場を診て」、「現場とふれ合って」、「考えて」、「聴く」であったと思っています。このためには聴く相手も必要となり、コミュニケーション能力が必要不可欠である。

また、プロジェクトを進めるに当たっては、発注者、受注者で立場が違うなか、一体感を持って同じ目的に向かって行くことが仕事のやりがいに繋がり、完成時の感動も一入であった。

土木技術者人生 50 年を振り返ると、国鉄入社当時に諸先輩からご指導を受けた「酒」、「麻雀」、「ゴルフ」が私にとって「発注者としての技術力の総括であった」と言っても過言ではない。

今後も CVV の活動や現在の仕事を通じて、社会資本整備の一助になれば幸いです。